

母親の育児意識に関する研究

—育児ストレスタイプの自由記述—

幸 順子・浅野 敬子*

Factorial Analysis of Behavioral and Emotional Representation in Maternal Activities by a Questionnaire Survey: Examination of Free Descriptive Answers by Mothers who have Emotional Stress in Nursing Children

Junko YUKI and Keiko ASANO

1. 問題

育児ストレスや育児困難は、子どもや母親の精神保健上の問題だけでなく、養育者を含む家族へのサポート体制、女性のライフサイクルの変化にともなう女性自身の生き方への葛藤など様々な要因が絡みあってもたらされることが指摘されている。

医療・母子保健の観点からは、従来から子どもの発達障害や母親の精神疾患が育児困難にかかわることが指摘され、木村・西内・平野 (小野)・高田 (2006)¹⁾ は、夫や他の家族のサポートが育児ストレスの低減にかかわることを示した。

心理・社会・教育学の観点からは、小出 (1999)²⁾、伊志嶺・小出・柴田 (2001)³⁾ らが、日本とカナダの育児意識比較調査研究を通して、日本における「孤独な子育て」の現状を指摘し、柏木 (2008)⁴⁾ は、日本社会における家族の歴史的変遷と現代の子育て事情の分析をふまえ、現代においては、子育ての社会化に積極的価値をおいた育児支援が必要であることを主張する。

乳幼児の母親のライフスタイルと育児意識の関わりに注目した研究として、菅野・田矢・柏木 (2003)⁵⁾ は、妻のフルタイム労働や自己実現の感覚が、妻の肯定的な育児意識と関係あることを明らかにした。また、八重樫・小河 (2002)⁶⁾、小坂 (2004)⁷⁾ も育児意識と母親の就労形態との関連性について分析し、フルタイム労働の母親よりも専業主婦に親役割満足が低く育児不安が高い傾向があることを指摘している。

櫻谷 (2003)⁸⁾ は育児期の母親の生活や育児に関する現状を広く把握・分析し、今日的な問題として、子どもや子育てへの経験的理解の乏しさと育児不安や困難、不適切養育との関連性を指摘し、夫の育児への不参加や、女性のライフスタイルの変化に伴う就労と子育てをめぐる女性の葛藤や就労支援の不十分さなどの問題があることを指摘している。

育児支援策については、家庭の養育者の意識、置かれた状況や抱える問題、社会状況とのかわりのあり方など、育児不安や困難を生み出す要因を明確化し、ニーズに応じた支援策が立案される必要がある。

浅野・高橋・時安 (2006)⁹⁾、浅野・百澤・山本 (2008)¹⁰⁾、幸・浅野 (2010a)¹¹⁾、幸・浅野 (2010b)¹²⁾ は、育児意識を育児情報や父親以外の人間関係などより広範な社会的関係の中でとらえることとし、養育環境の状況や問題について実証的に明らかにするために、育児状況に

* 至学館大学

関わる項目36項目を用いて、保育園児（3～5歳）、幼稚園児、子育て支援利用（子どもの年齢範囲0～3歳）の母親を対象とした「育児意識」に関する質問紙調査を実施・分析し、母親の育児意識に関する因子構造の特徴を検討してきた（表1）。

表1 筆者らの「母親の育児意識に関する研究」の結果（因子構造について）

研究	対象	結果内容
浅野・高橋・時安(2006)	保育園児の母親	4因子構造:1育児拒否、2育児情報不足感、3夫との協力関係、4育児状況への安心感
浅野・百澤・山本他(2008)	幼稚園児の母親	5因子構造:1育児拒否、2育児情報不足感、3夫との協力、4社会的育児支援利用、5安定的育児協力の確保/4因子構造:1育児拒否、2安定的育児協力の確保、3夫との協力、4社会的育児支援利用
幸・浅野(2010a)	子育て支援利用の母親	6因子構造:1子どもに対する否定的な感情・行動傾向、2社会的育児支援資源の利用、3夫婦間の協力関係維持、4育児知識・技能についての不足感、5子どもからの自由、6子どもとの一体感/2因子構造:1育児に関する全般的安定感、2育児困難の感覚
幸・浅野(2010b)	全グループの母親	5因子構造:1子どもに対する否定的な感情・行動傾向、2社会的育児支援資源の利用、3育児知識・技能についての不足感、4夫婦間の協力関係維持、5子どもからの自由

これまでの研究結果として、就労する母親と専業主婦の育児意識に関して①育児拒否、②育児情報不足感、③夫との協力、④安定的育児協力の確保（育児状況への安心感）などの因子が共通して抽出された。また、保育園児の母親は、保育園において提供されている支援が日常化し、社会的育児資源として自覚されないのに対して、幼稚園児の母親や子育て支援利用の母親においては、上記の因子に加えて「社会的育児支援利用」の因子が抽出され、他の育児支援資源に関心が寄せられる場合があることが示唆された。

2. 目的

本研究では、保育園児（3～5歳）、幼稚園児、子育て支援利用（子どもの年齢範囲0～3歳）の全グループを総合して因子分析を行い、育児意識構造を明らかにした中から子育て支援利用グループの因子得点に注目し、子どもへの否定的感情・行動傾向の高い、育児ストレスタイプの自由記述について検討することを目的とした。

3. 方法

質問紙

浅野ほか（2006）⁹⁾にて使用した質問項目および自由記述部分を、幸・浅野（2010a）¹¹⁾、幸・浅野（2010b）¹²⁾では対象者に合わせて一部改変した。質問紙作成については浅野ほか（2006）⁹⁾に提示されている。なお、質問項目の改変は、部分的な表現上の改変であり、浅野ほか（2006、2008）^{9) 10)}の結果と合わせて分析するにあたって差し障りのない程度の変更である。本研究で問題とする子育て支援利用グループに使用した質問紙の項目内容は、幸・浅野（2010a）¹¹⁾に示されている。

基礎資料

浅野・高橋・時安（2006）⁹⁾、浅野・百澤・山本（2008）¹⁰⁾、幸・浅野（2010a）¹¹⁾、幸・浅野（2010b）¹²⁾による、愛知県内O市公立保育園園児（3～5歳）、C市私立幼稚園園児、K市公立児童館親子教室参加（子どもの年齢範囲0～3歳）の母親を対象とした質問紙調査への回答545（うち保育園112、幼稚園283、子育て支援150）に基づく。

分析方法1

全グループを総合した因子分析の結果（幸・浅野2010b¹²⁾）に基づき、子育て支援グループ150名（子どもの年齢範囲0～3歳）についての5因子（因子1：「子どもに対する否定的な感情・行動傾向」、因子2：「社会的育児支援資源の利用」、因子3：「育児知識・技能についての不足感」、因子4：「夫婦間の協力関係維持」、因子5：「子どもからの自由」）それぞれの因子得点を算出した。各因子の質問項目内容を表2に示す。

表2 各因子の調査項目（「保・幼・支」グループ総合データ；5因子構造）

		質問項目
因子1	子どもに対する否定的な感情・行動傾向	7. 時々、子どもに口やかましく小言を言ってしまう
		6. 気に入らないことがあるとたまに子どもにあたりちらす
		4. 時々、子どもの欠点ばかり目についたり気になったりする
		12. 子どもをしかる時、たまに打つとかつねるなどの体罰をしてしまう
		1. 忙しいとたまに子どもに取り合わないことがある
		5. 時々、これはダメなどと子どものすることを禁止する
		3. 時々、子どもの要求や約束を忘れたり無関心だったりする
		29. 時々、子育てにプレッシャーを感じる
		2. 子どもがどんな遊びをしていても放っておくことがある
因子2	社会的育児支援資源の利用	26. 時には子育て支援などに参加してみたい
		25. 子育て支援などに参加したことがある
		24. 時々、子育ての情報を得る機会がある
		23. 子どもと安心して遊べる場所がある
		34. 他の母親との交流がある
		22. 時々、専門家から子育ての話を聞く機会がある
		15. 子どものためならどんな犠牲をはらっても満足していただける
		16. 子どもが家にいないと淋しい
		9. 子どもと過ごす時間が少ない
因子3	育児知識・技能についての不足感	14. 時々、カゼなど病気をした時にどうしたらいいのかわからない
		13. 排泄の仕方をどのように教えたらいいかわからない
		11. 時々、子どもへのほめ方、しかり方がわからない
		10. 時々、子どもとの接し方がわからない
		31. 子どもが一人でできることでも、つい手をだしてしまう
		32. 子どもの実年齢よりも赤ん坊のように接することがある
		30. 毎日、育児日記をつけている
28. 思っていた子育てと実際の子育てとは違う		
因子4	夫婦間の協力関係維持	36. 夫に何でも悩みを相談する
		35. 夫と子どもの話をよくする
		33. 夫婦で家事・育児を協力しあっている
		21. 育児に対して夫の理解がない
因子5	子どもからの自由	20. 育児を休みたい時には子どもを預かってくれる人がいる
		19. たまに用事のある時には子どもを預かってくれる人がいる
		18. 自分自身のストレス解消法を持っている
		17. いつも悩みを相談する相手がいる
		27. なかなか一人の時間が持てない
		8. 外出時、たまに子どもに留守番をさせたり他家へ預けたりする

分析方法2

全事例の各因子の因子得点と自由記述を対比させ、結果を明らかにした。自由記述の質問内容は資料付表を参照。

4. 結果

因子得点は平均値 = 0、標準偏差 = 1とした。因子1：「否定的感情・行動傾向」の得点の高低に注目し、因子1の因子得点が0.5以上(16/150事例)を育児ストレスタイプとした。育児ストレスタイプ事例の因子得点と因子得点から見た質問項目への回答パターン特徴を表3に示した。調査時、子育て支援の場に同伴していた子どもの属性と自由記述の回答及び因子得点から見た質問項目への回答パターン特徴を表4に示した。これらの内、因子得点が±1.0以上(8事例)のものについて*を付けて示した。

子どもの属性と自由記述欄への回答は以下の通りである。

表3 高否定的感情・行動傾向事例の因子得点(*因子得点±1.0以上±2.0未満、**因子得点±2.0以上)

事例	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	回答パターン特徴
1	0.83	-0.97	-0.32	-0.63	-1.28*	*(子どもからの)自由なし
2	0.84	1.87*	-0.54	0.64	-0.70	*社会的育児資源利用
3	0.61	0.39	0.68	0.73	-1.41*	*自由なし
4	0.59	-0.17	-0.83	-0.03	0.24	
5	1.00*	1.66*	-0.98	-0.34	-0.21	*(子どもへの)否定的感情・行動 *社会的育児資源利用
6	1.21*	-0.12	1.20*	0.62	1.31*	*否定的感情・行動 *知識技能不足 *自由あり
7	1.52*	1.51*	0.45	-0.93	0.58	*否定的感情・行動 *社会的育児資源利用
8	1.23*	0.18	-0.01	1.12*	-0.22	*否定的感情・行動 *夫婦間協力維持
9	1.01*	-0.13	-0.15	0.72	0.22	*否定的感情・行動
10	1.00*	0.10	2.13**	0.52	-1.13*	*否定的感情・行動 **知識技能不足 *自由なし
11	1.04*	-0.27	0.80	0.13	0.13	*否定的感情・行動
12	0.57	-0.16	0.90	0.84	1.37*	*自由あり
13	0.53	-0.23	-0.26	-0.80	0.08	
14	0.68	0.03	-0.09	-0.70	-1.13*	*自由なし
15	1.31*	0.56	0.02	0.35	-1.01*	*否定的感情・行動 *自由なし
16	0.53	-0.88	-0.31	0.67	-0.44	

表4 子どもに対する高否定的感情・行動傾向事例(因子得点0.5以上)の自由記述(一は無回答)と質問項目への回答パターン特徴

事例	1子育てをして将来心配なこと	2他の育児支援への参加の有無	3今後必要な育児支援	出生順位	年齢	性別	質問項目への回答パターン特徴
1	なし	ない	保育園の待機児童の減少	2	1Y6M	男	*(子どもからの)自由なし
2	思春期にどんな状態なのか(子どもの心が心配。自分が予想もしていなかった出来事を受け入れられるかどうか。どうしても、道をそれてほしくないと思ってしまう自分がある。	ない	-	1	2Y10M	男	*社会的資源利用
				2	2Y2M	男	
3	-	ない	-	1	2Y0M	女	*自由なし
4	将来思春期反抗期を迎えたときの息子との接し方	ある/地域の子育てマップの制作	子育てセンターに来ることができる人はいいが、そういう場に行くことさえできない人への支援	2	6Y4M	女	
*5	-	ある	-	1	3Y2M	女	*社会的資源利用
*6	-	ない	-	4	0Y8M	女	*知識技能不足 *自由あり
*7	地域のみんなで	ない	-	3	0Y6M	男	*社会的資源利用
*8	-	ある/〇〇教室、赤ちゃんがいっしょに遊ぶ	-	2	1Y1M	-	*夫婦間協力維持
*9	なし	ある/ふれあい広場	なし	1	1Y7M	男	
*10	-	-	-	1	2Y10M	女	**知識技能不足 *自由なし
*11	習い事や勉強(教育)	ある/広報に載っている公民館での親子体操や遊び(半年や1ヶ月のコース)	親子共々のお友達作りができる。妊婦さん同士のお友達作り	2	2Y9M	男	
				2	2Y9M	男	
12	長男がえん坊:きびしく育てていた方がいいか?十分甘やかした方がいいか?	ある/交通公園、児童センター	-	2	3Y1M	女	*自由あり
13	-	-	-	1	3Y2M	男	
14	-	ある/地域の子育てサークル	親子で交流できる場	1	-	-	*自由なし
*15	怒りすぎてしまうこと	ない	託児	2	2Y11M	女	*自由なし
16	-	ない	-	2	3Y0M	男	

※「事例」: *は因子1の因子得点1以上の高育児ストレス事例

※「質問項目への回答パターン特徴」: *は該当する因子の因子得点±1.0以上±2.0未満、**は該当する因子の因子得点±2.0以上

(1) 子どもの属性について

16事例中きょうだい2人連れ家族が2事例、子どもの人数は18名

性別：男児8名、女児8名、無回答2名

年齢：0歳代2名、1歳代3名、2歳代6名、3歳代5名、6歳代1名、無回答1名

出生順位：第1子7名、第2子8名、第3子2名、第4子1名

(2) 子育てをしていて将来心配に思うこと

16例中8例に記述が見られた。8例は無回答。因子1の因子得点が1.0以上の8例中3例に記述が見られた。

思春期、すなわちいわゆる反抗期の子育てや、教育問題への不安があることが示された。また、養育方法への迷いや怒りのコントロールの問題など、親自身の成長・発達の問題を抱えていることも伺える。

事例1：なし

事例2：思春期にどんな状態なのか（子どもの心が）心配。自分が予想もしていなかった出来事を受け入れられるのかどうか。どうしても、道をそれてほしくないと思ってしまう自分がいる。

事例4：将来思春期反抗期を迎えたときの息子との接し方

事例7：地域のみんなで

事例9：なし

事例11：習い事や勉強（教育）

事例12：長男甘えん坊：きびしく育てていった方がいいか？十分甘やかした方がいいか？

事例15：怒りすぎてしまうこと

(3) 他の育児支援への参加の有無とその内容

他の育児支援への参加については、有り7名、無し7名、無回答2名であった。因子1の因子得点が1.0以上の8例中4例が有りであった。

半数近い母親に、何らかの子育て支援への参加経験があることが示された。

事例1、2、3、6、7、15、16：無し

事例4：地域の子育てマップの制作

事例5：有り

事例8：〇〇教室（未就園児親子教室）、赤ちゃんがいっしょに遊ぶ

事例9：〇〇広場（児童館主催親子教室）

事例11：広報に載っている公民館での親子体操や遊び（半年や1ヶ月のコース）

事例12：交通公園、児童センター

事例14：地域の子育てサークル

(4) 今後必要な育児支援

16例中6例に記述があった。10例は無回答。因子1の因子得点が1.0以上の8例中5例が無回答。

子どもの預かりへのニーズや、子育て中の親子の交流へのニーズがあることが示された。

事例1：保育園の待機児童の減少

事例4：子育てセンターに来ることができる人はいいが、そういう場にくることさえできない人への支援

事例9：なし

事例11：親子共々のお友達作りができる、妊婦さん同士のお友達づくり

事例14：親子で交流できる場

事例15：託児

5. 考 察

(1) 自由記述から伺われる育児ストレスタイプの全体的特徴

育児ストレスタイプの自由記述について検討したところ、半数近い母親は、何らかの子育て支援への参加経験があることが示された。また、思春期、すなわちいわゆる反抗期の子育てや、教育問題への不安があることや、養育方法への迷いや怒りのコントロールの問題など、親自身の成長・発達の問題を抱えていることも伺えた。更に子どもの預かりへのニーズや、子育て中の親子の交流へのニーズがあることが示された。

全体に、育児ストレスタイプ事例の自由記述に関して大きな特徴は認められなかったが、事例15については因子得点から読み取れる「子どもへの否定的感情・行動傾向」「子どもからの自由のなさ」が自由記述にストレートに表れており、「怒りすぎてしまう」ことを心配し、育児支援として「託児」を求めていることが分る。

育児ストレスタイプの子どもの属性に若干の特徴が見られ、多胎児あるいは1年以内の年齢差のきょうだいがいる（年少の子どもは未熟児出産の可能性が考えられる）事例がある。多胎児や、未熟児は、障害児と並んで育児困難のリスクが高いと言われているが、育児ストレス8事例中2事例はそうした問題をかかえる子どもの母親であった。

(2) 育児ストレスタイプの自由記述と質問項目への回答パターン特徴の関連

因子得点1以上の育児ストレスのより高い事例に注目してみると、特に以下のような問題が考察される。育児ストレスのタイプについては、幸・浅野(2012)¹³⁾で分類されたタイプの特徴を表5に示した。

表5 幸・浅野(2012)で見いだされた育児ストレスタイプの特徴

育児ストレスのタイプ	ストレス内容の特徴
育児知識・技能の不足タイプ	子どもの発達についての知識や子どもと接する上での技能が不足し、子どもへの苛立ちにつながっていると思われるタイプ。
支援への依存タイプ	社会的育児支援資源を多く利用していたり、夫婦間の協力関係も得られているが、子どもに否定的なタイプ。 子どもの育てにくさや親となることへの葛藤・自信のなさなど複雑な問題が背景にある可能性がある。

<事例6>

幸・浅野(2012)¹³⁾で、「育児知識・技能の不足タイプ」とされた事例であり、子どもの発達についての知識や子どもと接する上での技能が不足し、子どもへの苛立ちにつながっていると推察されたが、自由記述を詳しく見ると、事態はより複雑であることが想像される。子どもの属性からは、4人きょうだいであることが明らかで、末子は生後8ヶ月児である。再婚など

の家庭の事情がない限り、育児経験は決して乏しくはないと想像される。さらに子どもからの拘束感も感じていないにも拘らず、育児の難しさと強い子どもへの否定的感情・行動傾向を示している。この事例で想定されるのは、まず第一に、子ども自身の気質的な問題が存在し、これまでの育児経験が生かせず育児が難しいと感じている可能性である。更に別の可能性としては、成長したより年長の子どもの育児に困難を感じているということも想定される。あるいは、再婚などの家庭の事情があり、育児困難を感じているという可能性もあり得る。このような事例の考察を通して、表面的な育児困難の訴えに注目するだけでなく、個々の事情を考慮した育児困難の理解と支援の必要性があることが示唆された。

<事例11>

因子得点の回答パターンに特に大きな特徴はみられないが、育児ストレスは高い。2人きょうだいで2歳9ヶ月の子どもがいる。自由記述の記載は豊富で、自由記述からは子育て支援の場に積極的に参加している様子が伺え、「親子共々友達作りが出来る場が必要」と感じており、子育てで将来心配なことに「習い事や勉強（教育）」と挙げており、教育熱心で、育児活動に意識的に携わろうとしている印象を受ける。しかしながら一方で子どもへの否定的感情・行動傾向は強い。

2歳代は最近では「イヤイヤ期」等とも言われ、子どもが親とは別の人格としての自己主張を明確に始める時期として、親からすると「親の思い通りにならない」厄介な時期と認識されることが多いようである。これは都市化、核家族化、少子化により、子どもの育ちについて経験的に学ぶ機会のない現代の親世代が、親になるまでに体験してきた多くの体験と同じように子どもや子育ても自分の思い通りにコントロールできるかのように思い込んでしまっていることの一つの現れと思われる。そうした現代の親世代が抱える親子関係の一面が、事例11に伺われるようでもある。育児支援は、一時的なものではなく、子どもの成長・発達による変化への理解を促すことを視野に入れ、長いスパンで親子関係の発達を支援するという構えも必要になるであろう。

<事例10、15>

子どもは1人ないし2人で2歳代の子どもがいる。子どもからの自由がないと強く感じ、特に事例10では知識技能不足を強く感じている。自由記述の記載が乏しく、背景について推察することが難しいが、これらの事例も事例11のように2歳代のいわゆる「イヤイヤ期」の子どもを抱えていることを考えると、子どもからの自由がないことのみが育児ストレスを生じさせているわけではなく、子どもの発達・成長・変化に親が追いつききれずに育児ストレスを高めている可能性もあると思われる。

<事例5、7、8>

これらの事例は、自由記述の記載が乏しく、属性についても、事例5は第1子で3歳2ヶ月、事例7は第3子で生後6ヶ月、事例8は第2子で1歳1ヶ月とまちまちであり、自由記述から育児ストレスの背景を推察することが難しいが、因子得点の回答パターンに共通する特徴が見られた。「社会的育児支援の利用」や「夫婦間協力関係維持」の因子得点の高さに見られるように、家庭内外の育児支援の協力を多く得ていると感じているにも拘らず、子どもへの否定的感情・行動傾向が高い事例である。幸・浅野(2012)¹³⁾の因子得点の回答パターンによる分類(表5)では「支援への依存タイプ」と分類され、背景に「子どもの育てにくさや親となることへの葛藤・自信のなさなど複雑な問題が背景にある可能性がある」と考察された。

社会や家庭内の育児支援を利用できていることを考えると、なんらかの理由でそもそもその

ような支援に恵まれていたか、あるいは自己のニーズに応じて支援を探し求め、解決に導こうとする能力を備えているとも推察される。一方で、自由記述の記載が乏しいのは、余裕のなさの現れであろうか。あるいは、幸・浅野 (2012)¹³⁾ で考察したように、母親個人が「親となることへの葛藤・自信のなさ」などの生き方への葛藤を抱えているとすると、子育てに関する意見を求める自由記述にはそうした複雑な問題が反映され得なかったということかもしれない。

因子得点の数値や回答パターン特徴の分析を利用して、母親が自己の育児意識及び行動のタイプを客観的に自覚することができれば、それ自体ある程度育児ストレスの軽減に繋がる可能性もあるだろう。更に踏み込んだ支援を行うためには、本研究の自由記述及び回答パターンの分析に見てきたように、育児意識の諸側面を整理して理解した上で、母親および家族のおかれた状況に対応した支援のあり方を計画していくことが必要となる。

最後にまとめると、本研究における、主に未就園児養育中の子育て支援を利用する母親への質問紙調査の自由記述と質問紙への回答パターンの分析からは、(例えば多胎児の出生など) 家族のおかれた状況、子どもの問題、子どもの成長・発達や養育・教育についての理解、母親自身の生き方への葛藤なども、育児ストレスの要因となっていることが推測され、そうした問題への支援が必要であることが示唆された。

6. 要 約

子育て支援を利用する母親150事例(対象となる子どもの年齢範囲は、おおよそ0～3歳)中、育児ストレスタイプの母親16事例について自由記述の分析を行った。半数近い母親が、何らかの子育て支援への参加経験があることが示された。また、思春期、すなわちいわゆる反抗期の子育てや、教育問題への不安があることや、養育方法への迷いや怒りのコントロールの問題など、親自身の成長・発達の問題を抱えていることも伺えた。更に子どもの預かりへのニーズや、子育て中の親子の交流へのニーズがあることが示された。

自由記述と質問紙への回答パターンの検討からは、(例えば多胎児の出生など) 家族のおかれた状況、子どもの問題、子どもの成長・発達や養育・教育についての理解、母親自身の生き方への葛藤なども、育児ストレスの要因となっていることが推測され、そうした問題への支援が必要であることが示唆された。事例数が限られているため一般論としては断定しにくいだが、事例の詳細を検討することで、乳幼児期(主に0～3歳)の育児ストレスを理解し支援のあり方を検討する一助となると考えられる。

Abstract

We examined free descriptive answers by the mothers who have emotional stress in nursing children. Below are what these answers show.

- ・ Nearly half of the mothers of this type have participated in parenting support programs.
- ・ Some of them are uncertain about parenting.
- ・ Some of them are anxious about their children's problems in the future such as achievement in school and rebellion in adolescence.

- ・ Some of them are having their own personal difficulties such as having trouble in controlling their feelings.
- ・ They have needs not only for childcare but also for communication and relationships with other parents and children.

Our study indicates that there are various factors which cause stress in child-rearing such as problems of the child itself, mother's conflict between work and family life, and other family situations. Accordingly, support should cover broad subjects in family life.

7. 謝 辞

調査にご協力下さった春日井市子育て子育て総合支援館（かすがいげんきっこセンター）関係者の皆様に心より感謝します。

8. 文 献

- 1) 木村一絵・西内恭子・平野（小原）裕子・高田ゆり子, 母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因. 九州大学医学部保健学科紀要, 第7号, pp.69-76, (2006)
- 2) 小出まみ, 地域から生まれる支え合いの子育て. pp.19-30, ひとなる書房, (1999)
- 3) 伊志嶺美津子・小出まみ・柴田明子, 人権尊重と相互扶助の市民意識に根ざしたカナダの子育て支援システムの研究: 地域住民の主体性に依拠した子育て家庭支援策の構築に向けて. 資料, pp.1-4, 子ども家庭リソースセンター, (2001)
- 4) 柏木恵子, 子どもが育つ条件—家族心理学から考える. pp.38-102, 岩波新書, (2008)
- 5) 菅野幸恵・田矢幸江・柏木恵子, 父母の子育てへの感情はどのように異なるか—子ども・子育てに対する感情への規定院の検討—. 発達研究, 第17巻, pp.39-52, (2003)
- 6) 八重樫牧子・小河孝則, 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌Vol.12, No.2, pp.219-239, (2002)
- 7) 小坂千秋, 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因—就労形態からの検討—. 発達研究, 第18巻, pp.73-87 (2004)
- 8) 櫻谷眞理子, 今日の子育て不安・子育て支援を考える～乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて. 立命館人間科学研究, 第7号, pp.75-86, (2003)
- 9) 浅野敬子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 保育園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要40, pp.49-58, (2006)
- 10) 浅野敬子・百瀬真美・山本裕子・高橋正教・時安和之, 母親の育児意識に関する研究: 幼稚園に子どもを預ける母親の育児意識構造. 中京女子大学研究紀要42, pp.115-123, (2008)
- 11) 幸 順子・浅野敬子, 母親の育児意識に関する研究: 子育て支援親子教室参加者の育児意識構造. 名古屋女子大学紀要第56号 (人文・社会編), pp.199-210, (2010a)
- 12) 幸 順子・浅野敬子, 母親の育児意識: 子育て支援利用の母親について. 日本保育学会第63回大会発表論文集, (2010b)
- 13) 幸 順子・浅野敬子, 母親の育児意識に関する研究: 子育て支援利用者の調査回答パターン分析. 名古屋女子大学紀要第58号 (人文・社会編), pp.187-195, (2012)

資料

付表 調査用紙の自由記述

(表)

育児に関する調査(お願い)

この調査は保護者の皆様が育児を通して日頃、感じておられることや心配に思っておられることについてお聞きするものです。どの質問にも正解や良い答えはありませんので、記入上の注意をよく読んでお答えください。ここで得られた結果は研究以外の目的で使用することはありませんし、個人的に迷惑をおかけすることはないと存じます。どうかよろしくご協力ください。

I. 下記の欄に、所定の事項をご記入ください。(いずれかに○をつけてください)

1. アンケートをされた方(母親 父親 その他)

2. お住まいの市[○○市 その他()]

3. 本日、ご参加のお子様についてお答えください

第1子	第2子	第3子	その他()
年齢	歳	か月	性別(男 女)

(裏)

III. 以下の質問にお答えください。

1. 子育てをされていて将来どのようにしていけばいいのか心配に思うことはありますか。それは、どのようなことですか。

2. 最近、子育て支援センター、育児サークル、ボランティアや NPO による広場など、さまざまな育児支援があります。げんきっこセンターの他の支援に参加したことはありますか? ○をつけてください。(ある ない)参加されたことがある場合それはどのような活動ですか?

3. 今後どのような育児支援が必要だと思いますか。

4. 調査に対するご意見がありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。